

ヴァスコ・ダ・ガマとマヌエル国王の固定観念

Obsession of Vasco da Gama and D. Manuel

浜岡 究

Kiwamu HAMAOKA

Keywords : *Vasco da Gama, Preste João*

キーワード：ヴァスコ・ダ・ガマ、プレステ・ジョアン、ポルトガル海外進出

1. はじめに

ヴァスコ・ダ・ガマ（1469頃-1524）は、インドへ海路で到着し、ヨーロッパ・インド間の香辛料貿易を開始したとされている¹⁾。しかし、ヴァスコ・ダ・ガマと乗組員たちは、インドにいと信じていたキリスト教徒に出会うことを熱心に期待しており、ポルトガル人航海者たちがインドに到着して帰還するまで、インドに関するポルトガル国王の強烈な固定観念が、航海者たちを悩ませる事になった。本稿では現存する唯一のポルトガル語史料を読解し、我が国では、まだ広められていない、その固定観念についてできる限りの考察を試みるものである²⁾。尚、続く2と3は序論、4と5が本論を構成する。

2. ジョアン2世（1481-1495）の情報収集からヴァスコ・ダ・ガマの出発へ

1481年8月28日に即位したポルトガル国王ジョアン2世は、アフリカ北部のサン・ジョルジェ・ダ・ミナ城建設、赤道以南のアフリカ沿岸の探検開始、そしてその結果としてエチオピアにいと言われた伝説のキリスト教徒プレステ・ジョアンに出会うこと、同時にインドに到達することを目的とした³⁾。プレステ・ジョアンについては本稿3で述べる。

デイオゴ・カンは、1482年8月31日、リスボンを出発し、アフリカ大陸中部内陸部を探検し始めた⁴⁾。バルトロメウ・ディアスは、1488年3月には、喜望峰を迂回してアフリカ大陸を北に向かったが、乗組員がこれ以上進む事を拒み、引き返した。しかし、バルトロメウ・ディアスは、大西洋南部の風の向き、潮流など、後のヴァスコ・ダ・ガマの航海に必要な情報を得ていた⁵⁾。

ジョアン2世は、アラビア語の話せるペロ・デ・コヴィリヤンとアフォンソ・デ・パイヴァ

を陸路で東洋に向かわせ、キリスト教徒プレステ・ジョアンがいるエチオピアと香辛料貿易についての情報を得ようとした。二人は1487年5月7日に、ポルトガルを出発し、地中海を渡り、アデン湾で別れた。アフォンソ・デ・パイヴァはエチオピアに向かい、ペロ・デ・コヴィリヤンはインドに向かった。後者は、カナノール、そしてカレクットに向かい、ヴァスコ・ダ・ガマがインドに到着する10年前の1488年にインドに到着し、ゴア、ホルムズ、ソファアラに行ったとされる。かなりの情報量があったとされるが、ジョアン2世には届けられなかったと考えられている⁶⁾。

1495年10月25日にジョアン2世が死亡し、マヌエル国王（1469-1521）の治世が始まった。マヌエル国王は、伝説のプレステ・ジョアンとインドを目指して、1497年7月8日にヴァスコ・ダ・ガマの艦隊をリスボンから出発させたのだった⁷⁾。

3. プレステ・ジョアン

プレステ・ジョアン（プレステは司祭を意味する）は、12世紀に書かれたと言われる書簡からヨーロッパに広まった。12世紀のポルトガル建国後、ポルトガルの国土からイスラム教徒を南部に向けて追放するレコンキスタ（国土回復）が、海上活動へと延長し海外進出に繋がった。その書簡は、航海王子と呼ばれたエンリケ王子（1394-1460）に多大な影響を与えた。歴史家ズララは、『ギネー征服年代記』において、エンリケ王子が海洋進出を促進した理由を述べている。エチオピアにいとされるキリスト教徒プレステ・ジョアンと出会い、イスラム勢力に対しての西洋の力を増強させることであった。強大なキリスト教国であるだけでなく、とても豊かであり、その魅力はとてつもなく大きくなった。そのような神話でもあり、たどり着くことができないユートピアでもあったプレステ・ジョアンのいる土地は、信仰のように人々の心の中に生き続けたが、ギネーを超えてもまだ広大なアフリカ大陸が南に向かって伸びている現実を知り、海洋進出の困難があった⁸⁾。

マヌエル国王は、プレステ・ジョアンの深い信仰に基づき、ヴァスコ・ダ・ガマを海路でインドに派遣し、1515年には、神父フランシスコ・アルヴァレスの外交使節をエチオピアに派遣した。神父フランシスコ・アルヴァレスは、『インドのプレステ・ジョアンの土地の真実の情報』⁹⁾の著者である。「ローマから別れた、異端のネストリウス教の子孫のプレステ・ジョアンの土地は、貧しい人々の土地で、人々はタオルもナプキンも持たずに食べて、薬も無い。橋、石、棒切れも無い。刀は良いものでなく、雪は降らない。馬はあるが、良いものではない。ネグス（プレステ・ジョアンもしくはその後継者）は、すべてを懇請する」¹⁰⁾と、このようにユートピアの土地とは程遠い現実であった。

結局、ポルトガル国王が経済援助をすることになったが、神話が、数世紀にわたる壮大な海外進出の事業を経て、ユートピアからはかけ離れた現実を知ることになった一例であると言える。しかし、プレステ・ジョアンの場合は、エンリケ王子も、マヌエル国王も単なる神話だと

知り得るに至らなかった。プレステ・ジョアンは、ひとつの書簡の著者の空想から生まれたものであるが、真実の文書のように読まれ、解釈された。プレステ・ジョアンは歴史の流れの中で神話が真実として取り扱われるようになった。それだけではなく、アフリカ西岸を南下し、大西洋南部を経て、海路でインドに到達するという偉業を「副産物」として成し遂げられるに至った¹¹⁾。

4. インドに関する固定観念と現実

架空のキリスト教徒プレステ・ジョアンと、同じようにキリスト教国と考えられたインドに到達し友好と同盟関係を結び、イスラム教徒に抗すること。そのことに対しての強い執着心と固定観念がジョアン2世の後継のマヌエル国王にはあった¹²⁾。架空の物語、神話を真実と思い込んで、「すでに知られているものを再認識する」ために探検に出ていくことになったと言っても過言でない。

現存するヴァスコ・ダ・ガマとその乗組員がインドでの滞在を描写する文書は、アルヴァロ・ヴェーリョによるものが最も知られている¹³⁾。ヴァスコ・ダ・ガマの第1回インド行き航海に同乗した軍人とされる。その手書き文書は約3世紀半後の1834年に歴史家アレシャンドレ・エルクラノがコインブラのサンタ・クララ修道院で発見し、ポルト公立図書館に収蔵され、後の歴史家達の叙述の基になった。したがって、我が国では日本語で紹介されていないアルヴァロ・ヴェーリョの叙述に関して、我々の既存の知識に疑問を呈しながら詳細な分析の目を配していくことの価値があると考えられる。

艦隊司令官であるヴァスコ・ダ・ガマは、マヌエル国王から課されたキリスト教徒の発見という使命を背負い、インド・カレクットのリーダーとの最初の出会いの中で、その使命をサモリン（以下インド国王と記す）に伝えている。マヌエル国王が課した強制については後程考察する。

「そして、司令官は、ポルトガル国王の使節はどのようなものかを彼に説明した。ポルトガル国王は多くの土地の主人、全てのことに於いてとても豊かであり、その比較はありません。60年以上前からポルトガル国王は、毎年、船を出して土地を発見するように命じていました。なぜなら、ポルトガル国王は、同じようにキリスト教徒の国王がその発見される土地に存在することを知っていたからです」¹⁴⁾。

したがって、ポルトガル人たちが、はじめてインド寺院（templo）に近づいた時に、キリスト教寺院のそばにいと判断していた。

「教会の主要部分の真ん中に尖塔があり、全てが石材でできている。一つの扉があった。

それはひとりの男が入れるくらいの幅だった。そして石の階段があった。その扉に通じていた。扉は銅の合金でできており、内部には小さな像があった。彼らは、それは聖母マリアのようだと言った。そして、教会の主要扉の前に、壁に沿って、6個の小さな鐘があった。ここで、司令官は祈りを捧げた。そして、私たち他のものは、彼と一緒に祈りを捧げた」¹⁵⁾。

アルヴァロ・ヴェーリヨは、ポルトガル人たちは、それは聖母マリアであると信じたと言わずに、単に「彼らはそのようだと言う」と述べることに注意されなければならない。そのことは、疑問に思われることを正確に表現したと推定できる。接触は、まだほとんど始まっていなかったし、グループの中に相手の言語の知識のあるものがいなかった¹⁶⁾。

マヌエル国王の要求をとっても心配していたヴァスコ・ダ・ガマは、寺院に入るや否や、ポルトガル国王がインド到着を信じるように、インド国王の臣下をポルトガルに連れて行かせるようにインド国王に要請した。司令官ヴァスコ・ダ・ガマが「インド国王に書簡を渡すことを要請すると、彼は後日渡すと言った。司令官は、ポルトガル国王は貴殿の兄弟で友人であると伝えた」¹⁷⁾。アルヴァロ・ヴェーリヨは続ける。

「国王はそれに応じて、彼（ポルトガル国王）を歓迎し、兄弟であり、友人であると言った。ポルトガル国王に使節を派遣するだろうと言った。あなたの土地の何人かの人々を連れて行かずに、ポルトガル国王に会う勇気がないので、この要請をしたのだと司令官が言った」¹⁸⁾。

しかし、友好的雰囲気は長続きしなかった。インド国王が、ヴァスコ・ダ・ガマに向かって、キリスト教徒たち、またはムーア人たちと共に一晩を過ごしたいかどうか尋ねた時、用心深いポルトガル司令官は、宗教のことよりも格別に安全を確保した。

「あれこれ、色々なことが双方の間であった。あの部屋の中で、すでに夜であったので、国王は誰と一緒に宿泊したいか、〈もしかしてキリスト教徒と、またはムーア人と？〉と言った。すると、司令官は国王に答えた。〈キリスト教徒とでもムーア人とでもない〉。そして、誰もいないところで、静かにやすみたいと要請した。国王は同意した」¹⁹⁾。

その後、到着したばかりのポルトガル人が最も注目をする文化的現実について報告をするが、ポルトガル人とインド人の間で、キリスト教徒や類似性に関してのいかなる言及もない。むしろ、キリスト教徒の人々として扱われていないのではないかと思うに至る。アルヴァロ・ヴェーリヨは続ける。

「そして、あたかも動物のような、それらの理性のない人々から遠ざかって、私たちは大いに安心した」²⁰⁾。

ムーア人に関しては、明らかに関係は非常に悪かった。ポルトガル人たちはムーア人の宗教をととてもよく知っており、およそ千年にわたる嫌悪感を抱いていた。しかも、それはお互いのことであった。ポルトガル人たちが船から陸に到着するのを見たムーア人たちは、「吐き気を催し、地面に唾を吐き、言っていた。〈ポルトガル、ポルトガル〉。その上、その初期において、直ちにわたしたちを捉えて殺す方法を模索した」²¹⁾。

リスボンに帰還するために出発するまで、インドでのその最初の出会いは、このように徐々に友好的でなくなっていった。アルヴァロ・ヴェーリョの叙述が伝える。

「新たな知らせが私たちを悲しくさせた。私たちが出発する時、私たちの男たちが敵のなすがままにあること、大きな仲違いを見たからである。キリスト教の国王が私たちに対して多くの嫌なことをすることを見て、さらに悲しみを感じた」²²⁾。

マヌエル国王へ宛てたインド国王の書簡は、友好を深めるという意志は見られず、もっぱら単なる商取引における利益のみを標榜させるものであった。いかなるキリスト教の友好を仄めかせない。

「貴国の貴族であるヴァスコ・ダ・ガマが私の国に到着され、そのことで私は大いに喜びました。私の国には多くのシナモン、多くの丁子、そして生姜、胡椒、そして多くの宝石があります。私が貴国側から欲するのは金、銀、そして珊瑚と赤色布です」²³⁾。

つまり、インド人の推測されるキリスト教義の中に、純粋な信仰は明白ではない。少なくとも話し相手たちは永遠の敵のムーア人ではないので、幾らかの親近性が存在するけれども、ただ単に用心と不信感だけがあった。ポルトガル人は、ムーア人とはまさしく何も関係を持ちたくない。インド人たちの宗教であるという理解の不足により、ポルトガル人はその宗教を命名する他の用語を持たず、その時、彼らを「キリスト教徒」²⁴⁾と言及することを選ぶ。また、幾人かは、疑いそのものを超越していた。以下に言及されたエピソードはアルヴァロ・ヴェーリョによって語られていない。ヒンドゥー教寺院において次のような懐疑の瞬間を記録したのはフェルナン・ロペス・デ・カスターニェーダであった。

「〈インド人たちは〉サンタ・マリアの名前を言った。そのように思えたヴァスコ・ダ・ガマは膝を地面につけると、私たちも彼のようにして、祈りを捧げた。そして、ジョアン・デ・サーは、壁に描かれていた画像のあの醜さを見ると、あれがキリスト教の教会で

あることを疑っていた。彼は膝を地面につけて言った。—もしこれが悪魔であれば、私は本当に神デウスを崇拜する。—すると、それを聞いたヴァスコ・ダ・ガマは、微笑みながら彼を見つめた」²⁵⁾。

このことは訪問の初期においてに発生した。続く日々、ポルトガル人たちは不信を増幅させて疑いを引きずっていったに違いない。他方、ポルトガル人がリスボンに帰還しようとする頃、インドにおける将来のポルトガルの介入の可能性について考えることになる。インドでは、大きな商業支配力はムーア人の手中にあり、ポルトガル人訪問者たちに直面したインド人の敵対心の増幅に影響を与えていたのはムーア人であった。ポルトガル人とムーア人の仲の悪さから、生命の安全さえも脅かされたのだった。

「他方、望まれていたのかもしれないが、私たちは多くのことを彼らのせいになかった。メッカや他の土地の商人であったここにいたムーア人たちは私たちを知っていたし、私たちの存在は彼らにとって不都合であったことを、私たちは確かにわかっていたからである。そして、彼らは国王に対して私たちが泥棒たちだと言っていた。さらに、もし私たちがメッカ、カンバイア、インゴスや他の土地の船をこの土地で航行させ始めると、そこを通過することをやめさせるだろうから、国王は何の利益もなくなるだろうと言った。反対に、私たちは何も得ることはなく、土地の征服さえもできないであろう。彼らはこのように言って、私たちがポルトガルに戻るができないように、彼らは私たちを殴り、殺すことを教唆した」²⁶⁾。

ムーア人についてのポルトガル人たちの認識はあまりにも非常に明白であった。これらの印象と共にポルトガル人はポルトガルに帰国し、その印象が将来のポルトガルの海外進出の展開を形成することになった。殊に、インドへ向かう途中にブラジルを発見した第二次インド行きポルトガル艦隊は、敵対する勢力に抗するために大幅に増強した13隻から構成される大艦隊であった。

5. 強制、脅迫とヴァスコ・ダ・ガマの警戒

不可解にも、アルヴァロ・ヴェーリョの航海記には、今までポルトガルの歴史家たちに無視されてきた鍵となる文章がある。以下は、筆者が本稿において、後程考察すると既に述べた、マヌエル国王がヴァスコ・ダ・ガマに課した「強制」に関するものである²⁷⁾。

「60年前から、祖先のポルトガル国王たちは、毎年、あれらの土地を発見するように艦船を送っていた。なぜならば、そこには彼らのようなキリスト教徒の国王らがいることを

知っていたからである。そして、今、マヌエル国王はヴァスコ・ダ・ガマとこれらの3隻の艦船を送って、彼を司令官に任命していた。マヌエル国王は、もしもキリスト教徒たちのその国王を発見することなしに帰国すれば、ヴァスコ・ダ・ガマの頭を切り落とすように命じるだろうとヴァスコ・ダ・ガマに対して言った」²⁸⁾。

ヴァスコ・ダ・ガマによってなされた告白、暴露は、脅迫があったことを伝える。たとえポルトガル人たちはヒンドゥー教徒たちが厳密にキリスト教徒ではないということを認識していたとしても、ポルトガル人たちがキリスト教徒に出会わなかったという知らせをマヌエル国王が受けたくないことをわかっていたので、マヌエル国王に真相の全てを話すことはできなかった。マヌエル国王に携えて行く情報に関して極度に用心するようになっていたとしても当然である。

ジョアン2世国王は、既にバルトロメウ・ディアスに対して、インドに行き、国王が友好を結ぶことになるキリスト教徒の情報をインドからもたらすという命令を課していたが実現できず、中世的なマヌエル国王は、反イスラム十字軍の自分の思想に執着した。そして、インドにキリスト教の国王たちが存在することを強く確信しており、その明白で脅迫的な最後通告²⁹⁾とともにヴァスコ・ダ・ガマを送った。

1499年8月29日になってリスボンに到着したヴァスコ・ダ・ガマは（テージョ川に入る最初の船はニコラウ・コエリョが指揮したベリオ号、2番目に入港したのはジョアン・デ・サーが指揮したサン・ガブリエル号だった）、自分の命を守り、少なくとも最初から全ての真実をマヌエル国王に告げないように、ガマの随員たちに対して指示を出していたはずだ。

更に、ここで、記述すべき重要な詳細がある。ジョアン・デ・サーは、ヴァスコ・ダ・ガマよりも前にリスボンに到着する。すでに述べたが、ジョアン・デ・サーは、ヴァスコ・ダ・ガマと一緒に微笑みを誘発した寺院における場面³⁰⁾での皮肉的、疑い深い重要人物であった。マヌエル国王に対して真実を全て明かさないととの取り決めがあったに違いないもうひとつの証明である。

また、ローマに送付されたマヌエル国王の書簡は、当時、バチカンで最も影響力のあるポルトガルの人物で有名なアルペドリーニャの枢機卿ジョルジュ・ダ・コスタに宛てられた。この書簡の中で、マヌエル国王は、ポルトガル人たちによって「発見された」「キリスト教徒たち」をさらに幾らか目立たせている。インドのプロジェクトのために共感と保護を引き寄せるために教皇に影響を及ぼし、教皇を魅了することを取り扱っていたからである。この重要な一節に注目してみよう。それは、ポルトガル人航海者たちによって発見された豊かさを国王が示した後になって出てくるが、実際のところ、宗教が書簡の中心テーマである。

「この街の国王はキリスト教徒であり、その住民の大部分はキリスト教徒の様に見えます」³¹⁾。

更に続ける。

「インドには多くの国王が居て、大体においてカレクットの王たちと同じように彼らの大部分はキリスト教徒であると断言します。5人か6人のカレクット出身の先住民たちが私たちのところに連れてこられました。その内の一人はムーア人でキリスト教徒でもありました。すでに述べましたように他の者たちはキリスト教徒でありました。これらの先住民たちはとても黒いですがギニア人ほど黒くはないです」³²⁾。

マヌエル国王は正真正銘のキリスト教徒だとは決して記していない。ヴァスコ・ダ・ガマはその書簡が書かれた1日後になってリスボンに到着するので、マヌエル国王がヴァスコ・ダ・ガマと話す前にその書簡が書かれたことに注意しなければならない³³⁾。インドの国王はキリスト教徒だと言わず、「キリスト教徒だと思われる」と言う。そして「そこの住民の大部分はキリスト教徒の様に見える」と付け加える。ローマ教皇に伝える情報を含む書簡には、インド人がヨーロッパのような完全なキリスト教徒であると分類した誤謬の兆候がなかったと言える。

*

このように、最初のポルトガル人とインド人との出会いに関して現存する文書の解読から、見えてきたことがある。たとえポルトガル人たちは、ヒンドゥー教徒たちが厳密にキリスト教徒ではないということを認識していたとしても、ポルトガル人たちがキリスト教徒に出会わなかったという知らせを、マヌエル国王が受けたくないことをわかっていたので、マヌエル国王に真相の全てを話すことはできなかつたであろうと結論することができる。ヴァスコ・ダ・ガマと彼の随員たちが、キリスト教徒たちに出会うことを期待していたことは事実には違いないが、キリスト教徒たちに出会わなかったので帰国後に殺害されるという恐れを得た。したがって、マヌエル国王に携えて行く情報に関して、彼らは極度に用心するようになっていたとしても至極当然のことである³⁴⁾。

オネジモ・テオトニオ・アルメイダによると、古代の物語に基づいた、ポルトガル人が探していた聖パウロの子孫のキリスト教徒たちにインドで出会ったとポルトガル人たちが確信したという、これまでの全ての古い歴史的な話は支持される根拠がない。インド到着直後、結局のところ誤謬が浮上しながらも、長い間、推論が支持されることになってしまった³⁵⁾。

更に、オネジモ・テオトニオ・アルメイダによると、ヴァスコ・ダ・ガマがリスボンに到着するのに多くの時間がかかっていたことと、ヴァスコ・ダ・ガマよりも前に別の2隻の艦船を出発させていた理由について疑問が浮上する。ヴァスコ・ダ・ガマはマヌエル国王に偉大な知らせを与える最初の人物になりたかつたはずである。兄パウロ・ダ・ガマが死亡し、大西洋の

アソーレス諸島テルセイラ島アングラ・ド・エロイズモに葬られたことは、3カ月の遅延を正当化させる十分な理由ではなさそうに見える。マヌエル国王を激怒させないように、あまり熱狂的でない問題を孕む知らせが、少しずつマヌエル国王に提示されていくように、ヴァスコ・ダ・ガマは別の艦船を最初に送りたいかったのであろうか。リスボン-アングラ、またはアングラ-リスボンの航海において1カ月を越えた艦隊はなかった³⁶⁾。

インドで出会ったことと、出会わなかったことについての知らせに対するマヌエル国王の反応を伝える艦船が、再びリスボンからアソーレス諸島に戻ってくるための十分な時間を稼ぎながら、ヴァスコ・ダ・ガマは待っていたのであろうか。史料が存在するのであれば、非常に興味深い研究テーマとなるが³⁷⁾、結局、ヴァスコ・ダ・ガマはリスボンでマヌエル国王に会いたくなかったとも考えられるであろう。いずれにしても、ヴァスコ・ダ・ガマ自身の生命の安全のために、固定観念に囚われたマヌエル国王³⁸⁾に対して、キリスト教徒が存在しない知らせを与える事には十分に注意しなければならなかった。

要するに、マヌエル国王は、犠牲者が出る、長くて辛い航海がポルトガル人航海者たちを待ち受けていた「実践と経験の積み重ねから得た知識」だけでは接近できない、あまりにも遠くのどこかがあると信じたプレステ・ジョアンに出会うという考えに取り憑かれていた。ヴァスコ・ダ・ガマも、マヌエル国王も、たとえ成し遂げられなくても「既成の伝説とその領域」から抜け出せない固定観念を抱いていた³⁹⁾。もはや、その領域から逃げられなかった。

6. おわりに

ポルトガルは、神話とユートピアを混同しながら、現実により得ることとして認識することがある。単なる空想を歴史が真実として作り上げ、「副産物」としてインドへ海路で到達するという偉業を成し遂げるに至った。しかし、その準備段階として、アフリカ北部、大西洋探検、アフリカ南部からインド洋への海洋探検、そして陸路でも情報収集を積み重ねた結果、最後にヴァスコ・ダ・ガマが成したことになる偉大な国家事業であった⁴⁰⁾。結局のところ、インドで出会ったヒन्दゥー教の全ての宗教的特徴をキリスト教インドバージョンとして解釈した。それには、ポルトガル人が根深く抱く固定観念が作用した。

更に、ヴァスコ・ダ・ガマがインド航路を発見したとか、インドに海路で到達してヨーロッパとアジアを繋いだと言われている。しかし、これまで見てきたように、伝説を事実と思い込んでしまい、無謀とも思われる多くのポルトガル人の冒険、実践、経験の積み重ねがあって、大きな確信を抱いてインドに向かわされたヴァスコ・ダ・ガマが歴史に大きく残り、英雄とされていることを改めて認識しなければいけない。このことを認識することによってポルトガルの海外進出の本質的部分が理解できる⁴¹⁾。

【注】

- 1) 我が国では、生田滋著『ヴァスコダガマ 東洋の扉を開く』（原書房、1992年）が普及した。
- 2) 本稿の作成について、2020年5月以降、ブラウン大学教授オネジモ・テオトニオ・アルメイダの指導を得た。
- 3) José Manuel Garcia, *Breve História dos Descobrimentos e Expansão de Portugal*, Lisboa, Editorial Presença, 1999, p.49.
- 4) *Ibidem*, p.49.
- 5) *Ibidem*, p.52. 大西洋とインド洋は海で繋がっていることが証明された。
- 6) *Ibidem*, pp.53-54. アフォンソ・デ・パイヴァとペロ・デ・コヴィリヤンが得た地理と東洋の貿易の情報がジョアン2世に届いていなかったために、ヴァスコ・ダ・ガマの航海はインドに関して十分な準備がされていなかったと考えられる。
- 7) *Ibidem*, pp.57-59.
- 8) Onésimo Teotónio Almeida, *A Obsessão da Portugalidade*, Quetzal, Lisboa, 2017, p.291.
- 9) Padre Francisco Álvares, *Verdadeira Informação das Terras do Preste João da Índia*, Agência Geral das Colónias, Lisboa, 1953. 日本では池上岑夫訳『エチオピア王国誌』（岩波書店、1980年）がある。
- 10) Onésimo Teotónio Almeida, *ibidem*, pp.292-293.
- 11) *Ibidem*, pp.294-295. 同様のことがある。地図製作者が架空の島ブラジルをアイルランド沖に描くと、実際にあると思い込んだ航海者が発見に努めた。発見されなければ、地図製作者はその島の位置を次々と移動させた。そして結局のところ見つけられなかったため、1500年に現在の南米大陸が発見された時に、これが探しても発見されなかったユートピアの「ブラジル島」であったとして、架空の島の名前を付けたという学説がある。この点について詳しくは、拙稿「翻訳：オネジモ・テオトニオ・アルメイダ著『ヴェラ・クルース島からブラジルへ』」拓殖大学言語文化研究所『語学研究』2021年を参照されたい。
- 12) Onésimo Teotónio Almeida, “O Suposto equívoco de Vasco da Gama e sua tripulação no encontro de cristão na Índia - uma revisitação carregada de dúvidas”, in *Sines, História e Património, o Porto e o Mar, Actas do Colóquio*, 7 a 9 de Setembro de 2017, Arquivo Municipal de Sines, 2017. pp.11-25. ブラウン大学オネジモ・テオトニオ・アルメイダは、この論文を通じて、プレス・テ・ジョアンと呼ばれるキリスト教国がアフリカのどこかにあり、インドはキリスト教国であると信じるジョアン2世と後継のマヌエル国王の固定観念が強かったことを述べる。この論文は、ヴァスコ・ダ・ガマの生地ポルトガルのシネスでのオネジモ・テオトニオ・アルメイダの口頭発表のものである。シネス文書館の講演会議事録に収められている。
- 13) Álvaro Velho, *Roteiro da Viagem que em Descobrimto da India pelo Cabo da Boa Esperança fez Dom Vasco da Gama em 1497*. Segundo um Manuscrito coetano existente na Bibliotheca Publica Portuense, Typografia Comercial Portuense, Porto, 1838. 本稿においては、筆者はNew York Public Library 収蔵のデジタル版を閲覧、引用翻訳した。古ポルトガル語で書かれてあるので翻訳は多大な困難を伴い、相当な時間を費やした。その他、ポルトガル語版 Wikipédia (Álvaro Velho) から1838年版をpdfで入手できる。2013年、この文書はユネスコから世界記憶遺産に指定された。オネジモ・テオトニオ・アルメイダの上述の論文も、最も興味ある同様の箇所を引用している場合があるが、双方は、研究に用いたその後刊行された底本、版が違うので、ページ番号も違っていることをお断りしておく。
- 14) Álvaro Velho, *ibidem*, p.61.
- 15) Álvaro Velho, *ibidem*, p.56.
- 16) 特にこの最初の接触において、コミュニケーションの問題が想像できる。実際はこの最初の航海

の全ての期間に問題があった。「ムーア人は反対のことを言うかもしれないので、ムーア人の言葉を理解できるキリスト教徒を呼んでくるように司令官は言った。インド国王は快く若く小柄でクアランと言う名の男性を呼んだ。しかし、一つのことは理解できたが、もう一つのことは理解できないなど、間違ったことが行き来した。そのキリスト教徒はムーア人の言葉を理解しなかったので、4人のムーア人に手紙を読ませて、それをまた国王の前で読ませると、国王は満足した」。(Álvaro Velho, *ibidem*, pp.66-67.)

17) Álvaro Velho, *ibidem*, p.61.

18) Álvaro Velho, *ibidem*, p.61.

19) Álvaro Velho, *ibidem*, p.62.

20) Álvaro Velho, *ibidem*, p.74.

21) Álvaro Velho, *ibidem*, p.75.

22) Álvaro Velho, *ibidem*, p.80.

23) Álvaro Velho, *ibidem*, p.85.

24) アフリカからインドへの水先案内人はイスラム教徒イブン・マジードとして知られているが、先住の人々の宗教についての識別や分類に関して、彼らに初めて接するポルトガル人にとっては困難があったようだ。ヴァスコ・ダ・ガマの要請によりソファアラのイスラム教国王王子スルタンによって派遣され、カレクットに艦隊を案内する役割を担った「キリスト教徒」とアルヴァロ・ヴェーリヨが言及する水先案内人に関して、歴史家ルイス・アダン・ダ・フォンセッカは次のように観察する。「情報源であるアルヴァリヨ・ヴェーリヨが書くような、キリスト教徒の水先案内人を取り扱っていないことは明白である。しかしながら、アルヴァロ・ヴェーリヨのそのキリスト教徒としての資質に関する言及は、偶発的な興味と共に一つの手がかりを構成することができる。航海中に私たちに現れる人々の分類において、もしも、キリスト教徒である資質分類は黒人やイスラム教徒以外の人々、そして頻繁にヒンドゥー教徒に対してほとんど区別されずに残されているのであれば、その同じ分類方法は、問題とされる水先案内人はヒンドゥー教徒であるのではないかということの意味する可能性があるのではないか？」Luís Adão da Fonseca, *Vasco da Gama. O homem, a viagem, a época* (Lisboa: Expo '98, 1997), pp.167-168.

25) Fernão Lopes da Castanheda, *História do Descobrimento e Conquista da Índia pelos Portugueses, Livro I e II*, 3.^a Edição, Imprensa da Universidade, Coimbra, 1924, pp88-98. 同書はポルトガル国立図書館Biblioteca Nacional de Portugal (Lisboa) からデジタル版(pdf)を入手できる。本稿で用いる原本とは版と出版元が違うが、Álvaro Velho, *Roteiro da Viagem de Vasco da Gama (1497-1499)*, Lisboa, Agência Geral do Ultramar, 1940.において、序文、注を書き、付録をつけたアベル・フォントウラ・ダ・コスタは、ポルトガル人たちがインド人たちをキリスト教徒であったことを信じなかった。彼のアルヴェロ・ヴェーリヨの叙述に関する詳細なコメントにおいて次のように書いた。「ガマと彼の13人の随員たちがキリスト教寺院に入っていたことを納得していたのではないかということは信じられない。」その主張の支えとして、彼は、アルヴァリヨ・ヴェーリヨが叙述したジョアン・デ・サーと司令官ガマの間で交わされた場面を引用する (Nota de Abel Fontoura da Costa, in *Álvaro Velho, Roteiro da Viagem de Vasco da Gama (1497-1499)*, Lisboa, Agência Geral do Ultramar, 1940, p.124)。G・ラーフェンシュタインも慎重な態度で次のように述べる。“It is just possible that some of the Portuguese doubted whether the Hindu Gods and images represented the saints of their own churches”.そして、彼は続けて、フェルナン・ロペス・ダ・カスタンニエーダと同じ一節を引用する。しかし、その疑問からさらに踏み込まない。(E. G. Ravenstein, *A Journal of the First Voyage of Vasco da Gama, 1497-1499*. Translated and edited with notes, an introduction and appendices (New Delhi - Madras: Asian Educational Services, 1998), p.54. 同様の件について言及しながら、ルイス・アダン・ダ・フォンセッカは次のように述べる。「ポルトガル人たちがキリスト教寺院を取り扱っていたことを本当に納得していたと信じない人がいる。そして、書記官ジョアン・デ・サーの観察が論拠にされる。しかしながら、双方の情報

を結びつけることは完全に可能である。一方で、ヨーロッパ教会とは異なる典礼や規則の性格のもので、大体において自由で博学で世俗的な伝統によって育まれた確信によるものであっても、東洋においてキリスト教コミュニティの存在が信じられていたことは実際である。他方で、その伝統に全く条件づけられていない、最も実地的な人間である書記官の反応は確かなものであり、物事をそのまま見ることが可能である。おそらく、司令官の微笑みは二つの解釈を理解する人の寛大な精神状態を露呈する」。(Luis Adão da Fonseca, *Vasco da Gama. O homem, a viagem, a época* (Lisboa: Expo '98, 1997), p.173.

26) Álvaro Velho, *ibidem*, p.80.

27) ポルトガルの歴史家たちにとっては、現存する文書の信憑性の他、「強制」や「脅迫」とまで認識されずに、ある種のユーモアも含めて「強く任務を課した」程度と思われたので、これまで真剣に考察されてこなかったとも考えられる。

28) Álvaro Velho, *ibidem*, p.61.

29) マヌエル国王とそのインドに到着するプロジェクトの中の十字軍的精神の延長線上にあるさらに強い中世的メンタリティーについて、以下を参照されたい。Luis Filipe Thomaz, *De Ceuta a Timor* (Lisboa: Difel, 1994) の他、Luis Filipe ThomazとJorge Santos Alvesの共著の論文“Da Cruzada ao Quinto Império”, em *Memória da Nação*. Org. de Francisco Bethencourt e Diogo Ramada Curto (Lisboa: Sá da Costa Editora, 1991), pp.81-164.

30) インドにおけるポルトガル存在についての厳格な批評家、歴史家Sanjay Subrahmanyamは、ヴァスコ・ダ・ガマとその13人の随員がヒンドゥー教寺院の訪問に言及する時、連綿とした観察をし、当地の文化の情報を与えながら問題提起をするものである。「我々の著者の観察、描写力は見逃さなかった。時々肯定されてきたことと反対に、この「東洋のキリスト教」の宗教実践と特異性について慎重に言及する。外部にある慣習の監視位置にガルーダ神の車のあるVaishnava寺院（度々想像されてきたKali寺院ではない）であると、外部にあるstambhaに鳥の像をそのほかに示唆しながら、明白になんらかの寺院のことを言っている。その上、ポルトガル人は、実際のところ、「聖母マリア」像を近くで調査する機会がなかったので、その意味が何であろうが、当地の対話者の言葉を信じたことに注目しなければならない。この状況の中で、ふたつの問題が提起される。ケララの言葉（またはインドのいかなる他の言葉）をポルトガル人の誰も話さなかったので、フェルナン・マルティンか他のアラビア語話者を通じて、アラビア語でコミュニケーションが進められたはずである。この場合、キリスト教とヒンドゥー教の地方様式の間で区別することが理論的には可能であることは明白である。というのも、16世紀初頭のアラビア語の語彙はそのことを可能性にさせるものであった。実際に、寺院の司祭たち（quafees）を示すために用いられた言葉は、アラビア語qasis, kāfir（ヒンドゥー語でもまたinfiel異教徒）の混合のポルトガル語バージョンである可能性が非常に高い。そのことは、ポルトガル人がアラビア語話者と共にこれらの人々と身元について議論したかもしれないことを示す。ここで、最初の問題である。どうして、ポルトガル人たちは寺院まで連れて行かれたのか？そしてポルトガル人たちが「聖母マリア」と解釈したと言われているのだろうか？その上、サン・トメーのキリスト教徒（もしくはシリア人）の長期のケララにおける存在があっても、ポルトガル人たちの対話者たちは、ポルトガル人たちがキリスト教徒であることを本当に知覚することが不可能であったのであろうか？ポルトガル人たちが寺院の内部（garbha grhaまたはsanctum sanctorum）まで入ることを許可されなかったという事実は、彼らが、キリスト教徒の存在を完全に確信していなかったとしても、彼らの身分なりルールについて何らかの疑問の存在を考えさせることになる。これらの記述の問題は、ふたつの簡潔な議題に集約される可能性がある。まず第一に、ポルトガル人は、教義の実践は自分達とは大きく相違する「失われた」東洋のキリスト教徒に出会うことを期待して行った。従って、いかなる構造物でも、たとえモスクであっても一種の教会として見るようになった。第二に、この派遣艦隊のポルトガル人たちは、マグレブのアラビア語を覚えていたことを忘れてはいけない。従って、意味が異なる方言、口語表現がマグレブのアラビア語とケララで話されるアラビア語の間に存在ことを想像することは容易である。フェルナン・マルテ

- インスとその随員たちがどのようにして誤謬へ導かれたのかを理解するために、「文化解釈」に関しての複雑な哲学的議題に訴える必要はない。彼ら当事者は、「失われた」一種のキリスト教徒の土地で出会いがあったとの確信を得ていたので、イスラム教を明確に表さないあらゆるものが、残り（の可能性）として、キリスト教のものとして見られたのであった」。Sanjay Subrahmanyam, *A Carreira e a lenda de Vasco da Gama*, Prefácio à edição portuguesa de Luís Filipe F. R. Thomaz. Lisboa: Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1998, pp.163–164.
- 31) Onésimo Teotónio Almeida, *ibidem*, p.20. 本稿で用いる原本とは版と出版元が違うが、Álvaro Velho, *Roteiro da Viagem de Vasco da Gama (1497–1499)*, Lisboa, Agência Geral do Ultramar, 1940, p.200. から引用されている。
- 32) Onésimo Teotónio Almeida, *ibidem*, p.21. 本稿で用いる原本とは版と出版元が違うが、Álvaro Velho, *Roteiro da Viagem de Vasco da Gama (1497–1499)*, Lisboa, Agência Geral do Ultramar, 1940, p.200. から引用されている。
- 33) 書簡は1499年8月28日付けのもので、ヴァスコ・ダ・ガマがリスボン到着日の前日であった。Onésimo Teotónio Almeida, *ibidem*, p.21 注28参照。
- 34) Onésimo Teotónio Almeida, *ibidem*, p.17–18. ヴァスコ・ダ・ガマは最初にリスボンに帰航しなかったが、最初に帰港した乗組員の流言について、歴史家ジョゼ・マヌエル・ガルシアは次のように述べる。「リスボンに到着した艦隊の最初の生存者たちは、インド人はキリスト教徒であるという更に間違った概念を伝えた。したがって、国王は、インドにおいて〈ポルトガル人の生存者たちはキリスト教徒を見つけ、カトリックには忠実ではないけれども、信仰には自由に準備されている〉というその間違った情報を広めた」。José Manuel Garcia, *Vasco da Gama e a Índia. 600 anos do Início da Expansão Portuguesa*. Vol. 4 da série “Descobrimentos” (Lisboa: Verso da História, 2015), p.86.
- 35) Onésimo Teotónio Almeida, *ibidem*, pp.24–25.
- 36) Artur Teodoro Matos, “Os Açores e a Carreira das Índias no séc. XVI”, in *Estudos da História de Portugal*, Vol.II, Séc. XVI–XX, Lisboa, 1983. を参照されたい。同時に、Onésimo Teotónio Almeida, *ibidem*, p.25. 注35。
- 37) この件についてアソーレス大学の友人Urbano Bettencourtに問い合わせたが、史料の存在を認める返答はない。
- 38) Luís Filipe Thomazはマヌエル国王のその人物描写を次の言葉の中でまとめている。「マヌエル国王の帝国主義、十字軍思想の最後の化身は、本質的に反イスラムであった」。さらに述べる。「マヌエル国王は、インドとの接触に超絶的な意義を与えていた。最初の試みにおけるその発見の中に、予言的暗示に包まれた神の神秘的意図を見た」。Prefácio à tradução portuguesa de *A Carreira e a Lenda de Vasco da Gama*, de Sanjay Subrahmanyam (Lisboa: Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 1998), pp. X e XII. 同時に、Onésimo Teotónio Almeida, *ibidem*, p.18. 注23参照。
- 39) Onésimo Teotónio Almeida, *ibidem*, p.24–25.
- 40) オネジモ・テオトニオ・アルメイダは、ポルトガルの海外進出について次のように準備されたものであったと述べる。Onésimo Teotónio Almeida, *ibidem*, p.22. に次のようにある。「もしも、ポルトガル人が出会っていった人々の言語と文化の迅速な知識における明敏さを展開させていなかったならば（他の航海者たちがやったようにアルヴァロ・ヴェーリオはインドの言葉の語彙集を自分の航海記に含めた）、大航海は失敗だったであろう。大航海は、沢山の、数多くの致命的な間違いと共に、trial and errorを重ねて連綿として進む学習プロセスを展開した。しかし、そのことは古代人の書物の指令によってではなく、現実に直面することによって課された同化と適応の必要性の確信を固めるために役立った。探検のリーダーたちは知識人であり抜け目なかった。その内の一人であるヴァスコ・ダ・ガマは、決定的にエリート集団の一部を構成した。プレステ・ジョアンとインド

については、結局のところ、伝説のキリスト教徒の国ではなかったが、そこにたどり着くプロセスは、学習、経験と知識の蓄積が必要であった」。

- 41) Duarte Pacheco Pereira, *Esmeralda de Situ Ortis* (1505年から1508年にかけて執筆)、Pedro Nunes, *Tratado em Defesa de Arte de Marear* (1537年にリスボンで刊行)、D. João de Castro, *Roteiros* (1538年から1541年にかけて執筆)、Garcia de Horta, *Colóquio dos Simples e Drogas e Cousas Medicionais da India* (1563年ゴアで刊行)、Fernando Oliveira, *Ars Nautica* (1570年刊行)、Francisco Sanches, *Quod Nihil Scitur* (1581年刊行) らが、古代の権威を拒否し、経験を真実の規範として受け入れ、科学の見識と方法を発展させた。そして、博学者、技術者、航海者の中で理論と実践を融合させた。最後に最も重要なことであるが、ポルトガル人航海者たちによって獲得された新世界の新しい知識を重要視する全体的意識を得た。これらに関する詳細はOnésimo Teotónio Almeida, "Portugal e a Aurora da Ciência Moderna - Uma Revisitação", in *Anais da Universidade de Évora*, n.º. 12, 2003, pp19-61. 同著者の英語の論文では、以下のものを参照されたい。Onésimo Teotónio Almeida, "Science During the Portuguese Maritime Discoveries, A Telling Case of Interaction Between Experimenters and Theoreticians", in Daniela Bleichmar-Paul De Vos-Kristin Huffine-Kevin Sheehan, *Science in the Spanish and Portuguese Empires*, Stanford University Press, Stanford, California, 2009, pp.78-92. 更に、ロジャー・クロリーの英語で書かれた著書は、1488年から1516年にかけて、ポルトガルがどのように世界帝国(大西洋からインド洋、更にアジアのマラッカ周辺まで)を築いたのか、分かりやすく膨大な史料に基づいて解説しているので以下を参照されたい。Roger Crowley, *The Conquerors. How Portugal Forged the First Global Empire* (London: Faber & Faber, 2015) . ロジャー・クロリーは、「ポルトガルの海外進出は、現代のアメリカの宇宙開発に関してのアポロ計画に匹敵する科学技術、知識、経験と冒険心があった」と述べる(Roger Crowley, *ibidem*, p13)。日本語では拙稿「ポルトガルの大西洋進出に関する考察」『教職課程研究年報』、武蔵大学教職課程、第26号、2012年5月、61頁-70頁にて、ポルトガルの海外進出方法について述べている。現在になると、ヨーロッパ以外や先住の人々の立場では、ヴァスコ・ダ・ガマを賛辞せず批評されることもあろうが、ヴァスコ・ダ・ガマの航海に限らずポルトガルの海外進出の行動は、当時のヨーロッパを中心とした文明の発達に寄与した。進出した海外の土地においては、ポルトガル人による先住の人々に対する教化活動、奥地探検と共に、グローバリゼーションによる地球規模の文明的発展の礎になったと考える。

(2022年10月12日受理)